

# 批判理論 (T.Adorno) と新実在論 (M.Gabriel) の 〈対自然〉の類似性についての比較検討

立命館アジア太平洋大学 清家久美

## 1 研究目的と方法

本発表では、いわゆる社会学における批判理論の旗手とも位置づけられる T. アドルノと新しい思想潮流である新実在論を主張する哲学者、M. ガブリエルの、それぞれの〈対自然〉の類似性を比較検討し、それぞれの位置づけを明らかにすることを目的とする。ポスト構造主義以降、「実在」をめぐる新たな思想潮流が、メイヤスーらの思弁的実在論との接点はあるものの、それとはまた別の動きとして展開されており、それが本発表で対象とするマルクス・ガブリエルの「新実在論」である。「新実在論」はマウリツィオ・フェラーリスなどと共に提唱されたもので、M. ガブリエル自身によれば、ポストモダン以降の時代を特徴づける哲学的立場であるという。その主張の要諦は、事物の唯一真正な本質の存在を主張する「形而上学 (古い実在論)」および、事物の本質が様々な認識主体の間で社会的に構築されると主張する「構築主義」を批判する中で、明らかとされている。新実在論は、事物の認識主体による構築性を認めつつ、それと同じ資格で事物それ自体の確固とした実在性を主張する。その中でも、彼の主張における社会学／社会科学についての中心的な論点を抽象し、アドルノの対自然のあり方と比較するという方法を取る。

## 2 考察と結論

M. ガブリエルの新実在論に見られる社会学／社会科学に関連する3つの中心的な批判点は、(1) 反物質主義による自然主義・科学主義批判 (2) 主観の前提性の批判、すなわち対象化についての批判 (3) 統一的・包括的世界観の否定 ということがわかった。すなわち「観察者をともなう mit 世界」は構築主義の「観察者の世界」の類似に見えるが、主体との関与と事実は同時であり、事実は実在するという。主体と共に事実は成立するが、しかし事実そのものは主体によって構成されるのではなく「端的に事実として成立する」のだという。こうした議論は M. ガブリエルの「思考以前の存在」が存在するからこそ神話が生じるという主張の延長上にあり、T. アドルノの否定弁証法において主題的にかたられている「客体の優位」に類似している。T. アドルノの新たな野蛮が始まる契機であると主張する社会批判の根拠としての「自然の宥和」やミメシスという概念は、M. ガブリエルの対自然に類似するという主張に類似していることがわかる。それぞれの位置づけについてはさらに議論する。

## 文献

Adorno, Theodor W, Popper, Karl R et al., 1969, *Der Positivismusstreit in der deutschen Soziologie*, Neuwied/Berlin: Luchterhand. (= 1979, 城塚登・浜井修訳『社会科学の論理: ドイツ社会学における実証主義論争』河出書房新社.)  
Ferraris, Maurizio (translated by Sarah De Sanctis), 2015, *Introduction to New Realism*, London/New York: Bloomsbury Academic.  
Gabriel, Markus and Zizek, Slavoj, 2009, *Mythology, Madness, and Laughter: Subjectivity in German Idealism*, New York/London: Continuum. (=2015, 大河内泰樹・斎藤幸平監訳『神話・狂気・哄笑: ドイツ観念論における主体性』堀之内出版.)